慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | アングロ・サクスンの抒情詩に就て |
| Sub Title | |
| Author | 厨川, 文夫(Kuriyagawa, Fumio) |
| Publisher | 三田史学会 |
| Publication year | 1939 |
| Jtitle | 史学 Vol.17, No.3 (1939. 4) ,p.57(397)- 84(424) |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Journal Article |
| URL | http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19390400-0057 |

# アングロ・サクスンの抒情詩に就て

厨川文夫

## 一

紀元六二七年の復活祭の當日、Northumbria の王 Edwin はその臣下らと共に洗禮を受けてキリスト教徒となつた（*The Anglo-Saxon Chronicle*, MS. A, anno 627）。これよりさき Edwin は、ローマから派遣されて來た宣教師 Paulinus の勸むる所に從ひ果して父祖代々の信仰を棄ててキリスト教に歸依すべきものか否かを賢者らを集めた會議に諮問したことがある。その會議の模樣が、Bede（673—735）の *Historia ecclesiastica gentis Anglorum*, Lib. II, cap. 13 に詳しく述べられてゐるのであるが、この時王に仕ふる僧侶（勿論キリスト教のではない）の中、最も主だつた Coifi といふ者（'primus pontificum ipsius Coifi'）は敢然と多數の賢者達の面前で王に向つて、自分らが從來信奉して來た神々が全く何らのよき力ももたず、何らの役にも立たぬと言ひ放つた（'ego autem tibi verissime quod certum didici, pro-

fiteor, quia nihil omnino virtutis habet, nihil utilitatis religio illa quam hucusque tenuimus')。又他の貴族が言ふ。地上に於ける人の生は、館へ飛び入り、忽ちこれを通り拔けてしまふ雀の如きもの。冬の夜、王がその家臣らと共に晩餐の席に着いてゐるとき、一羽の雀が一つの窓より飛び入り、直ちに他の窓から翔け出でる。この時、館の中央には火が焚かれて暖かであるが、戸外は到る處、猛り狂ふ冬の雨と雪の嵐にかき亂されてゐる。雀が館の中にゐる中は冬の嵐の苦痛を感じない。然しその快さも束の間、雀は冬から冬へと再び飛び去つてしまひ、人はも早、この雀の姿を見ることがない。かくの如く此世に於ける人の生は暫しの間は明かである、然しその後に續くもの、その前に過ぎ去つてしまつたものは、全く我々には分らない（'Ita haec vita hominum ad modicum apparet; quid autem sequatur, quidve praecesserit, prorsus ignoramus'）。されば新しい敎へ（キリスト敎）が我々に更に充分な確信を齎すものであるなら斷然それに從ふべきである、とこの貴族は言ふ。彼の言葉及び前に引用した Coifi の言葉は、當時アングロ・サクスン人の間にゲルマアニアの古來の神々に對する信仰が全く廢れ、一面現世の無常を痛感しながら他方に於て來世に對する希望も持ち得ない不安な精神狀態があつたことを示すものと考へられる。

アングロ・サクスン人の間にも、Tíw (OHG. Ziu; Icel. Týr; Goth. *Tius) や Wóden (OHG. Wuotan; Icel. Óðinn) や Þúr (Icel. Þórr; ODan. Þúr) 等の如き、古代ゲルマアニアの神々の名が記憶に殘つてゐ

たことは、Tuesday (=OE. Tíwesdæg, 卽ち「Tíwの日」)、Wednesday (=OE. Wódnesdæg), Thursday (=OE. þúresdæg) などの日の名稱が行はれてゐた事實によつても明かであり、又此等の神々の名が當時の文獻中に現はれる處によつても知り得る。著しい例を擧げれば、Wóden の名の如き、アングロ・サクスンの總ての王家の系譜に織り込まれてゐる程である。(註一) 又 OE. の殊に詩の中に 'Wyrd' の名が屢々現はれる。Wyrd (ON. Urðr; OHG. Wurt; OS. Wurd) は、北歐の神話の運命の女神、三人の Norns の中の一人で、この名は OE. weorþan (「……になる。……が起る。」) といふ動詞に關係がある。Norns はスカンヂナヴィアの文獻では神及び人間の幸運と不幸との兩方を司ることになつて居る。アングロ・サクスンの詩に現はれた處を見ると Wyrd は、も早單に「運命」といふ意味の普通名詞に用ひられてゐる場合が多いのであるが、專ら人間の破滅や災厄や悲嘆を齎らすことのみが考へられてゐた樣である。*Salomon and Saturn* の詩(註二)では「强力な Wyrd は凡ゆる罪の源、鬪爭の母、悲しみの根、哀泣の頭、すべて原罪の父母、死の娘」('wyrd seo swiðe, / eallra fyrena fruma, fæhðo modor, / weana wyrtwela, wopes heafod, / frumscylda gehwæs fæder and modor, deaðes dohtor'; ll. 442—46) なりとし、この Wyrd が「槍を携へて〔人間の〕魂を射る」('heo gast scyð, heo ger byreð'; l. 437) と言つてゐる。

古代スカンヂナヴィアの *Edda* や sögur に現はれた物語にあつては、人間が苦境に陷つた場合、神々の中の何れかに祈願して其加護を蒙ることがあつた。十七世紀に到つてもスカンヂナヴィアでは齒痛

を癒すに Þórr に對して祈禱を捧げ、犧牲を供することがあつた。[註三] 然しアングロ・サクスン人にとつて神々はも早、人間に被護を與へるものではなかつた。上に引用した Coifi の言葉の如く、「神々は全く何らのよき力ももたず、何らの役にも立たぬ」ものであつた。Wyrd は專ら惡しき力を振つて人間に破滅を齎らす。「堅固な城砦はくだけ、塔は崩れ落ちて霜で被はれてゐる。これは Wyrd が破壞したものである。又この城や塔を建てた者も、こゝに住んで豪奢な生活をした者も今では死して大地に抱かれ、武士らの叫びも酒宴の賑かなどよめきもない。これらは Wyrd が運び去つてしまつたものだ」と「廢墟」(*The Ruin*) の作者は言つてゐる。[註四]「さすらひの人」(*The Wanderer*) に「運命 (Wyrd) は全く如何ともしがたきものなり」('wyrd biþ ful aræd'; l. 5) といひ、敍事詩 *Beowulf* に「運命は常になり行くべきまゝになりゆくものなり」('gæþ a wyrd swa hio scel'; l. 455) といひ、又 Cotton 寫本の「箴言詩」(*Gnomic Poem*) に「運命は最も强きものなり」('wyrd biþ swiðost'; l. 5) といひ、孰れも「運命」といふものは人間にとつて不可抗のものだといふアングロ・サクスン人の思想を表はしてゐる。「海行く人」(*The Seafarer*) の後半 (ll. 64ᵇ—124) はキリスト教の僧侶が追加したものと考へられるのであるが、この部分の中に「運命と神とは如何なる人の心よりも强し」('wyrd biþ swiðre, meotud meahtigra, þonne ænges monnes gehygd'; ll. 115ᵇ—116) と言つて、運命の力をキリスト教の神の力と並べて觀てゐるのである。

「運命の力は如何とも出來ない、人生は果敢ないものだ」といふアングロ・サクスン人の思想は *The Wanderer* の次の一節(註五)に最もよく表はれてゐる。——

Eall is earfoðlic eorþan ríce,

onwendeð wyrda gesceaft weorald under heofonum:

hér bið feoh láene, hér bið fréond láene,

hér bið mon láene, hér bið mág láene:

eal þis eorþan gesteal ídel weorþeð!

(「地上の王國は盡く苦患に滿ち、運命の工作は天の下なる世界を變らしむ。此處にては財物も果敢なし、此處にては友も果敢なし、此處にては人も果敢なし、此處にては血族もはかなし、この大地のひろがりはむなしきものとなりゆかむ！」)——*The Wanderer*, ll. 116—110.

かくの如き思想は二種類の結果を生んでゐることが認められる。その一つは、この世に在る中に英雄的な行によつて名を擧げ、その譽を後世に殘すべきだと考へるものである。敍事詩 *Beowulf* の中に「腕に覺えあるものは死に先んじて譽を得むと努むるこそよけれ」('Wyrce sé þe móte / dómes áer déaþe'; ll. 1387ᵇ—1388ᵃ) といふベーオウルフの言葉に明かに示されてゐる。異教的な Germanic な思想である。死後 Óðinn の館 Valhalla へ迎へられ、「前世の英雄達」(einherjar) と共に饗宴に列なるといふやうな

希望はアングロ・サクスンの武士には最早ない。(註六) 然しキリスト教徒ならざる武士には Paradise も亦存在しない。Edwin 王の貴族が述べた如く、現世の彼方は冬の雨と雪との嵐が狂ふ闇夜である。彼らの求めたものは英雄としての現世の譽であつた。子々孫々にその業績を語られ、その名を謳はれることであつた。(註七) 人間界及び自然界の敵に雄々しく戰ひ、毅然として身を持すれば、無慈悲な Wyrd と雖も彼を救ふ場合がある。英雄ベーオウルフは冬の荒海に Breca と水泳の技を競つてブレカを破り、七夜の間獰猛な怪魚共と戰つた擧句、漸くにして陸地に近づくを得たと語り、「運命 (Wyrd) は未だ死期到らざる人に、彼の武勇强き時は、屢々救ひを與ふることあり。」('Wyrd oft nereð unfægne eorl, / þonne his ellen déah'; ll. 572b—573) と述懷してゐる。「さすらひの人」(*The Wanderer*) に「疲れたる勇氣は運命 (Wyrd) に抗ひ得まじ」('Ne mæg wérig mód wyrde wiðstondan'; l. 15) とあるのも同じ精神の表はれである。

運命の力は如何ともし難い、この人の世は果敢ないものだといふ思想は、斯の如く一面に於ては毅然として死を怖れず、武勇を以て運命乃至 Wyrd の力に拮抗し、以て譽を後世に殘さむとする悲壯な英雄の理想をアングロ・サクスン人の中に生んだ。彼らにあつては Tacitus が「危難を渴望する民」('gentes periculorum avidas'; *Hist.* V, 19) と呼んだ父祖の血は、到底運命に對して柔順に屈從することを許さなかつたのである。キリスト教化されて後も、この精神は殘つてゐる。例へば聖アンドレアースの話

彼の武勇强き時は、見棄て給ふこと絕えてなきなり。」('For þan ic eow to soðe secgan wille, / þæt nǽfre forlæteð lifigende God / eorl on eorðan, gif his ellen deah'; ll. 458—460)。こゝに我々は、上に引用した英雄ベーオウルフの言葉に於けると殆ど同一の精神が、同じ語句を以て表はされてゐるのを見るのである。唯 Wyrd であつたものが、キリスト敎の神に置き代へられたに過ぎない。英雄の理想は不變である。

又他面に於ては、アングロ・サクスン人の宿命觀と人生無常の思想とは、彼らを驅つて現世を蔑ましめ、天國の幸福を憧憬せしめた。これは勿論キリスト敎化されて後の思想である。*The Seafarer* の後半は、前にも述べた如く、前半 (ll. 1—64[a]) より後の時代に作られたものと考へられるのであるが、そこに見られるものはこの思想である。「されば、我には地上のこの死せる果敢なき生よりも、主の歡びこそひとしほ熱き願ひなり。我は地上の幸がとこしへに續くことを信ぜざるなり。」('For þon me hatran sind / dryhtnes dreamas þonne þis deade lif, / læne on londe; ic gelyfe no / þæt him eorðwelan ece standeð'; *The seafarer*, ll. 64[b]—67)。又 *The Wanderer*, ll. 114[b]—115 に「我らのためにあらゆる安泰の立つところ天に在す御父に慈悲と慰めとを求むる者には幸ありなむ」(Wel bið þám þe him áre séceð, / frófre tó fǽder on heofonum, þǽr ús eal séo fǽstnung stondeð) とあるのも同樣である。

以上見て來た如く、アングロ・サクソン人の思想はそれが異教的英雄的なものであらうと、キリスト教的なものであらうと、その根底をなすものは現實の生に對する救ひ難い暗鬱な宿命論と無常觀であつた。キリスト教化された後には、この暗鬱は來世に對する希望によつて幾分緩和されてゐる。然し其場合にも現實の生を扱ふ態度は依然として憂鬱である。今日我々に傳へられたアングロ・サクソンの抒情詩と稱すべきものが、殆ど全部悲哀の感情を表はしたものであるのは決して偶然とは言ひ難い。

(註一) C. Plummer and J. Earle, *Two of the Saxon Chronicles Parallel*, Oxford, 1899, Vol. II, pp. 4—6.

(註二) C. W. M. Grein, *Bibliothek der angelsächischen Poesie*, hrsg. von R. P. Wülker, III. Band, 2. Hälfte, Leipzig, 1898, p. 79.

(註三) F. B. Gummere, *Founders of England*, New York, 1930, p. 342.

(註四) これは此詩の現存する部分の大意である。'Wyrd' は 1.1 と 1.25 とに現はれる。

(註五) 拙稿、'Studies in Anglo-Saxon Poetry' (*English Literature and Philology*, IV, Tokyo, 1933), p. 17.

(註六) 古代スカンヂナヴィアでは、戰死者は皆 Oðinn の第一の館 Valhalla (ON. Valhöll, 卽ち「戰死者の館」)へ赴くものと信じられてゐた。Cf. H. M. Chadwick, *The Heroic Age*, Cambridge, 1926, pp. 396 ff.; P. A. Munch, *Norse Mythology*, New York, 1926, pp. 5—7; 317—315.

(註七) 例へば *The Seafarer*, ll. 72—80.

(註八) *Andreas and the Fates of the Apostles*, ed. G. P. Krapp, Boston, 1906, pp. 18, 105—106.

## 二

Norman Conquest 以前の英詩の中、その內容から見て抒情詩として分類され得るものが今日に傳へられてゐる。キリスト敎の聖歌乃至讃美歌や祈禱歌の類が多いのであるが、アングロ・サクスン人の精神を窺ふには、それらの宗敎詩よりは寧ろ俗界の詩の方が適當である。こゝには「デーオル」(*Deor*)、「ウルフとエアドワケル」(*Wulf and Eadwacer*)、「夫の手紙」(*The Husband's Message*)、「妻のなげき」(*The Wife's Complaint*)「廢墟」(*The Ruin*)、「さすらひの人」(*The Wanderer*)、「海行く人」(*The Seafarer*) の七篇を採る。これらは孰れも Devonshire の Exeter Cathedral 所藏の寫本、所謂 'Exeter Book' (又は Codex Exoniensis) の中に殘存するのみで、(註一) 他に寫本は發見されてゐない。

(註一) Exeter Book は W. Keller が、その書體によつて年代を判定した處によれば、Codex Vercellensis と同時代か又はそれより幾分古いことになる。彼は Codex Vercellensis を九六〇—九八〇年頃に書かれたものとしてゐる (*Angelsächsische Palaeographie*, Teil I, Berlin, 1906, S. 40)。なほこの寫本に就ては拙稿 'Studies in Anglo-Saxon Poetry' (*English Literature and Philology*, IV), pp. 1—4 參照。

*Deor* の詩 (Exeter Book, fol. 100ᵃ—100ᵇ) は逆境を嘆く人 (作者自身ではない) を慰めむとする試みと解し得る。「もし悲嘆にくれたる人、幸を奪はれて坐し、心の中暗うなりて、苦しみの量はてなしと覺えしならば、その時はかく思ふを得む。——この世くまなく心賢しき主〔神〕は絶えずめぐり給ひ、

幾多の貴人に慈悲を、ゆるぎなき譽を顯はし見せ給ひ、ある者達にはあまたの苦難を顯はし見せ給ふなり。」——

Siteð sorgcearig, sǽlum bidǽled,
on sefan sweorceð, sylfuum þinceð
þæt sý endeléas earfoðа dǽl,
mæg þonne geþencan, þæt geond þás woruld
wítig dryhten wendeð geneahhe,
eorle monegum áre gescéawað,
wíslícne blǽd. sumum wéana dǽl.

——*Deor*, ll. 28—34.

この部分は從來一般に、原作に對し後人が附加したものとされた。Alois Brandl のごときは、この二八—三四行を以て古代英詩中に發見され得る Interpolationen の中最も確實なるものとなし、このキリスト教的な附加あるがために斯くも單なる一私人の折に觸れての詩が記錄に殘され忘却から救はれたものかも知れぬ、とまで言つてゐる（*Gesch. d. alteng. Lit.*, Strassburg, 1908, S. 975）。然しこの部分を後人の附加として斥ける前に、我々は改めて原文の意味を吟味して見ることが必要である。第二十八行の

主語と動詞の位置轉倒（inversion）が近代英語の *if*-clause に相當する意味のものであることを最初に指摘したのは L. L. Schücking（*Kleines angelsäch. Dichterbuch*, Cöthen, 1919, S. 32）であつた。彼は‘sorg-cearig’を‘sitеð’の主語と見る。處が Holthausen や Sedgefield はこの語序を正常なものとし、主語として Holthausen は‘mancher’を、Sedgefield は‘a man’を補つてゐる。後の解釋に從へば第三十行の終に休止符を置く必要がある。筆者は主語を補足せず、inverted order を條件を表はす clause とする Schücking の解釋を採る。又第三十一行に、‘þás woruld’（この世界）の‘þás’が‘geþencan’（「思ふ」）と alliterate してゐる點は注目すべきである。一般に頭韻（アリタレイション）を受ける綴は强勢（ストレス）を受ける。殊に第二の half-line では頭韻を受ける綴はたゞ一つに限られて居るので、その綴はその half-line 中のどの語よりも强い stress をもつことになる。この場合、普通ならば最も强勢を受け頭韻をもつ筈の名詞 woruld を凌いで、‘þás’が頭韻をもつてゐるのは、「この地上の世界、現世」の意味を强調するもので、從つて現世に起つた喜びも悲しみも何れも一時的なものに過ぎないことを示唆してゐるものと解すべきである。この部分の意味はパラフレイズして見れば次の樣になる。――「不幸のかずかずに襲はれて憂愁に沈んだ時には、汝がこの地上の世界に生活してゐるのだといふことを想へ。神は賢しき心を以て（卽ち我々の考へ及ばぬ計を以て）我々人間に喜びと悲しみとを割り當て給ふのである。」こゝで作者の意の存する處は、第一に現在の不幸は神の定め給ふたもの故、甘んじて受けねばならぬといふ點、第二に

人生は永遠のものでなく、一時的なもの、悲しみも喜びも等しくやがては去るものだといふ點である。從つてこの一節は、この詩に六度繰返して現はれる一句「そは過ぎ去りぬ、これも亦然らむ」（'þæs oferéode; þisses swá mæg'; ll. 7, 13, 17, 20, 27, 42）の意味を敷衍したものに他ならず、從つて第二八—三四行は此詩の他の部分に對し何ら不調和なものを含んでゐない。そこに潜んでゐるものは矢張り宿命論と人生無常觀である。この部分にのみキリスト教の神が現はれ、此詩の殘りの各節には盡く古代ゲルマアニアの傳說中の人物が扱はれてゐるといふことは、一見甚しい時代錯誤の如く見える。從來學者が此部分を後人の interpolation と見た根據の一つは玆にあつたのである。然しアングロ・サクスンの僧侶が、異敎時代のゲルマアニアの英雄達の傳說に通曉してゐたことは、幾多の證據によつて明かである。(註二) 其種の人物がこの詩を作つたものとすれば、異敎時代の傳說中の人物のことを語つた詩にキリスト敎の神に關する事柄が現はれることも訝しむに足りない。筆者は、この部分を Brandl, Chadwick, Dickins を始めその他一般の學者の如く後人の附加したものとなすことに疑問をもつものである。

作者は六つの不幸の例を述べ、その一つ一つを「そは過ぎ去りぬ、これも亦然らむ」といふ一句で結んでゐる。最初の五つの例は古代ゲルマアニアの傳說から得たもの、最後の例（ll. 35—41）は作者自身にふりかゝつた不幸として述べられてゐる。——彼はその名を Deor といひ、嘗ては Heoden の王家（Heodeningas）に仕へて厚遇を受けた宮廷詩人であつた。處が詩に巧みな Heorrenda 現はるゝに及ん

で、これに主君の寵を奪はれ、その昔主君が自分に與へ給ふた封土（landryht）は今や彼が領する處となつた、といふのである。しかしこれは、此詩の作者自身に關する事實を語つてゐるものではなくて、作者の創作と見るべきである。こゝに現はれる Heoden といひ詩人 Heorrenda といひ、孰れもゲルマニアの傳說中の人物である。*Edda Snorra Sturlasonar* の第二篇「詩語」(*Skáldskaparmál*, cap. XLIX) や *Sölaþáttr* などでは Hjarrandi (=OE. Heorrenda) は Heðinn (=OE. Heoden) の父となつてゐるが、中世オーストリアの物語詩 *Kûdrûn* では Hôrant (=OE. Heorrenda) は Hetel (=OE. Heoden) の近親で、その歌を聞いた獸は森に草食むを止め、蟲や魚は彼の歌に晝の營みを忘れる程の優れた詩人となつてゐる。いづれにせよ、Deor の場合は傳說中の有名な詩人を捕へ來つて、自分を其詩人に敗れた競爭者として描いた巧妙な創作に他ならない。「わが名はデーオルなりき」（'Mé wæs Déor noma'; l. 37）と言つて過去形の動詞を用ひてゐるのも昔語りの體にしてゐるからである。同樣な過去形の用例は *Beowulf*, l. 1457 にもある。Deor に關する不幸な物語の終りにも矢張り「そは過ぎ去りぬ。これも亦然らむ」（'þæs oferéode; þisses swá mæg'; l. 42）といふ繰返しの句がある處から見れば、これも又過ぎ去つた不幸の一例と見るべきものである。從來多くの學者は此詩を作者 Deor が自分を慰めるために作つた詩と解釋し、繰返しの句の中の 'þisses' は作者自身の不幸を指すものと見てゐる。(註三) 然しこの詩を以て慰安を求める讀者乃至聽者に與へたものと解するならば、この 'þisses' は讀者乃至聽者が各自の不幸

の場合に當て嵌めて考へればよいことになり、此詩は「その不幸も亦同樣に過ぎ去るであらう」と慰めるものになる。しかも'þæs oferéode'の'þæs'は、他の不幸の場合と同樣にDeorの不幸の場合にも適用し得ることになつて、此場合の解釋に從來の如き無理と不統一はなくなる譯である。

この繰返しの句が長さ不等の各節の終りにあるといふ點は、この詩の著しい特色をなすものである。繰返しの句をもつたアングロ・サクスンの詩としては、*Deor*の他に*Wulf and Eadwacer*が唯一のものであるが、其處に現はれる「もし彼困窮に陷らば、果して彼らは彼に食を與へむと思ふや？　我らにはかゝることなし。」('Willað hý hine áþecgan, gif hé on þréat cymeð? / Ungelíc(e) is ús')は單に第二—三行、七—八行のみに用ひられ、第九行以下には現はれず、*Deor*に於けるが如く終始一貫して用ひられてゐる繰返しの句はない。從來の學者は、*Deor*の繰返しの句を'refrain'と考へ、そこで'strophe'が分れるものと考へてゐる。然しこの場合各々の節の區分を決定してゐるのは、その內容であつて、詩の形式ではないといふことを注意せねばならぬ。第一節(ll. 1—7)では有名な鍛工Welundが Niðhad王のために膝腱を拔かれて幽閉された苦痛を語り、第二節(ll. 8—13)にはWelundに犯された王女Beadohildの憂ひを述べ、第三節(ll. 14—17)ではMæðhildに對するGeatの戀の苦しみ、第四節(ll. 18—20)には(Þeodricが Mæringasの城市に亡命して三十年を送つたこと、第五節(ll. 21—27)には殘虐なEormanricの暴政の下にゴート人の苦しんだことを述べ、第六節(ll. 28—42)には前に引

用した逆境一般に關する考察と Deor の沒落とを述べてゐる。斯の如く內容によつて節が區分されてゐるので、各節の形式は甚だ不揃である。最も短い節は繰返しの句と共に三行、長いものは七行、最後の節は最も長く十五行から成る。R. Imelmann (*Forschungen zur altengl. Poesie*, Berlin, 1920, S. 235) の考へる如く、果して *Deor* の作者が長さ不等な strophe と refain とを Vergilius の *Ecloga VIII* に學んだものであるとしても、*Deor* の場合の refrain の用法は Vergilius の場合とは異り、單なる挿入詩句 (versus intercalaris) と見るべきものではない。各節に述べられた不幸の例を一々「哲學の慰安」の便(よすが)となす役割をもつてゐるのである。

(註二) 拙稿「古代英詩に關する一考察」(「英文學研究」第十五卷)、一七三—一八二頁參照。

(註三) 例へば E. Legouis, *Histoire de la littérature anglaise*, Paris, 1929, p.21; W. P. Ker, *The Dark Ages*, Edinburgh, 1923, p. 255; B. Dickins, *Runic and Heroic Poems*, Cambridge, 1915, p. 46; S. A. Brooke, *The History of Early English Literature*, Vol. I, London, 1892, p. 8; B. ten Brink, *History of Eng. Lit.*, tr. by H. M. Kennedy, New York, 1889, pp. 61—2 など。

*The Wanderer* (Exeter Book, fol. 76ᵇ—78ᵃ) の詩はその內容の上から二つの部分に分けることが出來る。「さすらひの人」の名稱が適合するのは此詩の前半 (ll. 1—57) のみで、後半は大部分 *The Ruin* (Exeter Book, fol. 123ᵇ—124ᵇ) と同樣な題材を扱つてゐて「さすらひの人」には關係がない。第一—五行は Prologue ともいふべきもの、久しい間唯獨り冷い海を渡り行かねばならぬ運命をもつた者は神の慈

悲を求める、運命は全く如何ともし難いものだ（'Wyrd bi⁊ ful aræd!'; l. 5）といふ作者の考へを述べてゐる。第六行に於て、主君に死別し、戰に親族を喪ひ、故國を離れて氷る海を渡りつゝ放浪する一人の男が現はれる。第八行以下はその男の獨白になつてゐる。彼は夜明け毎に自分に降りかゝつた運命を嘆かねばならない。而も心をうち開けて語り得る者は誰も生き殘つてゐない（ll. 8—11ᵃ）。人間が如何に嘆かうとも運命に逆つて何事もなし得るものではない。それ故、武士たる者は悲嘆の情を胸中に閉ぢ込めて置くのが氣高い態度である（ll. 11ᵇ—18）。主君を喪ひ、親族を失ひ、家を失つた彼は、彼を好遇し慰むる主君を求めて窮乏と冬の危難とを忍び、海を越えてさまよひながら、絶えず己の情を胸に縛つてゐねばならなかつた（ll. 19—29）。悲みに閉された男は嘗て主君在世の頃の華かなりし樣を想ひ起す。「彼は廷臣達や寶の受領、如何に彼の主君が、若かりし頃彼を饗應（もてな）し給ひけるかを想ひ起す。歡びはことごとく滅びぬ！」（ll. 34—36）。悲嘆にくれて眠れば夢を見る。彼は再び酒宴の館に立ち、慕はしい主君を抱いて接吻し、兩手と頭とを膝の上に横たへるやうに思ふ。——〔これは忠順の誓をする儀式であらう。〕眼が覺めると矢張り孤獨である。彼の前には灰色の浪が見える。海鳥が浴みし、翼を擴げてゐるのや、霜や雪が霰と共に降つて來るのを眺める。主君を喪つたといふ想出の傷は愈々烈しく痛み、悲みが甦る。自分の一族の幻が現はれる。彼は歡びの聲を擧げて彼らを迎へ、熱心に見詰めるが、然しその武士らは再び溶けるやうに消え失せ、彼が自己に立ち返ると悲しみも又戻つて來る（ll. 37—57）。

この様な個人の幸福の喪失を嘆くことから轉じて、此詩の後半はこの世の中到る處に起つた榮華の沒落の様が語られるのであるが、その前に作者の、かゝる世態に關する考察と人々が此世に於て採るべき道を說く敎訓的な部分 (ll. 58—72) がある。——

For þon ic geþencan ne mæg geond þás woruld,
for hwan módsefa mín ne gesweorce,
þonne ic eorla líf eal geondþence,
hú hí fǽrlice flet ofgéafon,
módge maguþegnas. Swá þes middangeard
ealra dógra gehwám dréoseð and fealleþ!
for þon ne mæg wearþan wís wer, hé áge
wintra dǽl in woruldríce. Wita sceal geþyldig,
ne sceal nó tó hátheort ne tó hrædwyrde
ne tó wác wiga ne tó wanhýdig
ne tó forht ne tó fǽgen ne tó feohgífre
ne nǽfre gielpes tó georn, ǽr hé geare cunne.

Beorn sceal gebídan, þonne hé béot spriceð,
oþ þæt collenferð cunne gearwe,
hwiber hreþra gehygd hweorfan wille.

「さればわれ、貴人の世路を、如何に彼ら雄々しき武士（つはもの）らが思ひがけなく館（やかた）を離れしかをつらつら思ひ廻らすとき、何故にわが心の暗うならざるかてふことをいかにすとも〔lit. 此世に於て〕思ふ能はざるなり。かくの如くこのうき世は日々に滅び倒るゝなり。人はこの世にあまたの歳を得たらむまでは賢明となる能はざればなり。賢者は須く勘忍強くあるべく、あまりに猛からず、あまりに言葉急ならず、又武士はあまりに小心ならず、またあまりに猪突ならず、又あまりに臆病ならず、又あまりに歡ばず、又あまりに物欲りもせず、とくと知りてむまではゆめ誇るにあまり急ならずあるべきなり。誇らかなる武士は、彼が誓をなすとき、須く胸の想ひが何處へ赴くべきかをとくと見極めたらむまで待つべきなり。」——*The Wanderer*, ll. 58—72.

第七三行からは *The Ruin* と同樣の主題になる。今や此世到る處に、風に吹き曝され霜に被はれた壁が立つてゐる。昔饗宴の行はれた館（やかた）はくづれ、主君も尊大なりし人々も倒れてゐる。或者は戰に奪ひ去られ、或者は屍を漁る鳥のために海上へ運ばれ、或者は灰色の狼に裂かれ、又或者は悲嘆に暮れる戰友によつて地中の洞に埋められる。かくして今や城は棲む人もなく立つてゐる。この次に現はれる獨白

(ll. 92—110) には對句が繰返されて、次第に高まる悲痛の情が表現される。—— Éalá beorht búne! éalá byrnwiga! éalá þéodnes þrym! (あゝ輝かしき杯よ！ あゝ武者よ！ あゝ王者の榮光よ！) 亡びた榮華を思ひ、怖ろしい運命 (wyrd) の力を考へ、自然の力の荒れ狂ふ樣を描いて、悲みは、軈て對句をなして詠はれる厭世の感情に高まつてゆく。——「こゝにては財物も果敢なし、此處にては友も果敢なし、此處にては人も果敢なし、此處にては血族もはかなし」(hér biðð feoh lǽne, hér biðð fréond lǽne, / hér biðð mon lǽne, hér, biðð mǽg lǽne; ll. 108—109)。

*The Wanderer* の詩に現れた榮華の沒落や幸福の喪失といふ motif と、死滅や破壞や暗鬱な自然の描寫、及びこれらを一貫して流れる嘆きの感情と人生に對する無常觀とはアングロ・サクスンの抒情詩のティピカルなものである。榮華の沒落が *The Ruin* に如何に扱はれてゐるかは既に前節で述べた。*The Seafarer*, ll. 82 ff. にも同じ motif が出る。「時はうつろひ地上の王國の榮華はことごとく去りぬ。嘗てありしが如き王も皇帝も、黃金を與へ給ふ君も今はなし。昔それらの人々は彼らの中に最も華々しき行をなし、こよなく王者にふさはしき譽の中に世を送りしかども。その榮えはことごとく倒れ歡びは去りぬ。今やさほどの力なき者ら生き延びてこの世を占め、苦みて日を送るなり。譽は墜ちて影もなし。」又 *The Seafarer* の作者は「我は地上の幸がとこしへに續くことを信ぜざるなり」(ic gelyfe no / þæt him eorðwelan ece stondaðð; ll. 66ᵇ—67) と述べてゐる。榮華の沒落や人生の無常を語つた

ものがアングロ・サクスン人に好まれたことは *Beowulf* の中に織り込まれた抒情詩的な部分によつても明かである。例へば、或る貴族の末裔がその昔自分の一族が榮えた頃を想ひ起して嘆く獨白（ll. 2257—2265）がある。わが一族のあらゆる者は戰死してしまつた。今では酒宴の館に竪琴の響もなく、勇しい鷹が其中を飛ぶこともない。冑も鎖子鎧も驕ては武士に倣つて朽ち果てるであらう、といふやうなことを述べてゐる。更に又詩以外の文獻にも此種の例が見られる。Alfred 大王が Orosius の *Historia adversus Paganos* を古代英語に譯したものが殘つてゐるが、其中に沒落したバビロンの都が、人類全部に向つて自ら話しかけてゐる樣に仕組んだ處がある。——「今や我はかくの如く倒れ滅びた。見よ、汝の世界には如何に强大なものでも、永久に續くものはない。汝らは我によつて、これを眼のあたり見るであらう。」（'Nu ic þuss gehrorem eam *and* aweg gewiten, hwæt, ge magan on me ongietan *and* oncnawan þæt ge nanuht mid eow nabbaþ fæstes ne stronges þætte þurhwunigen mæge'; *King Alfred's Orosius*, ed. H. Sweet, EETS., 1888, p. 74, ll. 26—28）といふのであるが注意すべきことには、此の部分は Orosius のラテン語の原文には無いのである。卽ち飜譯をなした Alfred 大王乃至他のアングロ・サクスン人が創作して譯文中に入れたのである。前に擧げた *Beowulf* の例に於てもさうであるが、斯の如く榮華の沒落や幸福の喪失といふ motif が物語の途中に現はれると、忽ちこれを敷衍し、しかも *The Wanderer* や *The Seafarer* などの抒情詩の場合と同樣な獨白にしてゐるといふことは、アングロ・サ

クスン人が「榮華の沒落」や「幸福の喪失」といふ詩の motif が惹起す感情に最も敏感であつたことを示すものと考へられる。

この「幸福の喪失」の motif は、戀愛を扱つた場合にも現はれる。*The Wife's Complaint* に於て女は獨白する。——「幾度となく我ら二人は、たゞ死のみを除き、他の如何なるものも我ら二人を離れしめざらむと誓ひしなりき。後になりてこは變改せられ、今は我ら二人の愛は恰も嘗てなかりしがごとし」（'Ful oft wit beotedan / þæt unc ne gedælde nemne deað ana / owiht elles. Eft is þæt onhworfen; / is nu swa hit no wære / freondscipe uncer'; ll. 21ᵇ—25ᵃ)。この詩に描かれた自然は非常に暗いものである。彼女は森の槲の木の下の洞に閉ぢ込められてゐる。谷は暗く峯は聳え立ち、棲處の周圍には茨が生ひ茂つてゐる。彼女は此處でたゞ獨り夜明け毎に嘆かねばならぬ。「地上には戀人らありて相想ひつゝ暮し臥床を守れり。しかるに我は夜明けに唯獨り樫の木の下に、これらの洞の間をくまなく歩む。」(ll. 33—36)。これを Middle English 時代の戀愛を歌つた抒情詩に描かれた自然と比較すれば非常な相異がある。Middle English 時代のものには、假令戀愛の悲しみを歌つた詩でも、春の太陽が照り亙り daisy の花が咲き、nightingale が歌ふといふ樣な自然が描かれてゐる。此種の自然の美に對する嗜好はフランスの南方に起つた詩の影響を受くるに及んで覺醒されたものであり、地中海的なものである。Old English 時代のイギリス人の嗜好は、未だ此種の自然には充分に眼醒めてゐなかつた。彼等の心に

最も強く訴へたのは自然の暗い烈しい半面であつた。夜、沼、崖、森林、荒海、暴風、雪、霰、雨、氷などの描寫はアングロ・サクスンの詩の到る處に現はれる。*The Wanderer* には自然が運命（wyrd）と同じく地上の人々を襲ふ樣を描いてゐる。――「荒天、ひたはしる暴風雨は此等の岩の斜面にうち當る。暗き夜の影、闇を深めて來るとき、冬の恐怖は大地を縛り、北の方より怒の中に激しき霰のあらしを人人に送る」（'*and þás stánhleoþu stormas cnyssað, / hríð hréosende; hrúsan bindeð / wintres woma, þonne won cymeð, / níþeð nihtscúa: norþan onsendeð / hréo hæglfare hæleþum on andan*'; ll. 100—105）。*The Seafarer* にもこれと同樣の描寫がある。――「夜の影くらく迫り、北の方より雪降り來り、白霜は大地を縛り、最も冷たき粒なる霰は地上に降る」（ll. 31—33[a]）。

比較的明るい自然の描寫が *The Seafarer* の中（ll. 48—55）に見られる。初夏になると王侯の住居には美しい花が咲く。野は美しくなる。郭公鳥が啼いて雄々しい心をもつた者の心をかき立て、彼らを海路の旅へ赴かせるといふのである。又丘の中腹にある森に郭公鳥が啼く時、船に乘つて南方に待つ汝の夫の許へ赴け、いふ處が *The Husband's Message* の中に出て來る（ll. 19—28）。郭公鳥（OE. géac）はアングロ・サクスンの代表的な春の鳥であつた。Alcuin（735—804）のラテン詩「春と冬との論爭」（'*Conflictus Veris et Hiemis*'; ed. K. P. Harrington, *Medieval Latin*, Boston, 1925. pp. 130—132）は中世ヨーロッパ文學に多い「論爭」文學の先驅をなすものであるが、此詩に於ても OE. 詩に於けると

同様、冬の沈默を破るものは郭公鳥（cuculus）である。「春」は言ふ。「我は望む、わが最愛の鳥郭公の來らむことを。そは赤き嘴もてよき歌を唱ひつゝ、家々に於てすべての者らにとりて常に最も歡ばしき訪問者となるものなり。」（ll. 10—13）；——

Opto meus veniat cuculus, carissimus ales.

Omnibus iste solet fieri gratissimus hospes

In tectis, modulano rutilo bona carmina rostro.

然しこの郭公鳥さへ、*The Husband's Message* に於ては「悲しき郭公鳥」（'géomor géac'; l. 22）であり、*The Seafarer* に於ては「悲しき聲もて」（'geomran reorde'; l. 52）人の心を搔き立て、「不幸を豫告する」（'sorge beodeð'; l. 54）ことになつてゐる。その他の鳥といへば、氷る樣な荒海に奇怪な叫びを擧げる「かつおどり」（'ganet'; *The Seafarer*, l. 20）とか「こじやくどり」（'huilpe'; ilid. l. 21）或は屍肉を漁る鴉（'hræfn'; *Beowulf*, l.3024, *Maldon*, l. 106）、或は氷のしたゝる翼を持つた鷲（'earn'; *The Seafarer*, l. 24）の如き暗い聯想を伴つたものゝみである。

又人間の世界を描いても、戰や破壞や死の如き、矢張り暗い半面の描寫が優れてゐる。十三世紀に到れば既にイギリスに於ても女の美を讃へた抒情詩が現はれてゐる（K. Böddeker, *Altenglische Dichtungen des MS. Harl.* 2253, *Berlin*, 1878, S. 144—150; 167—171）。アングロ・サクスンの現存する抒情

詩にはその種のものが全くない。又嘗て存在したかも疑問である。その種の嗜好も矢張りフランスの trouvères 乃至 troubadours から Middle English 時代に傳へられたものであつた。アングロ・サクスン人が死を描いた著しい例は、抒情詩では *The Wanderer*, ll. 79ᵇ—84 に、「誇らかなりし勇士らは盡く壘壁のほとりに斃れぬ。或者は戰が斃して運び去りぬ。或者は鳥が深き海を越えて運び去り、或者はかの灰色なる狼が『死』に頒ち與へ、或者は悲痛なる面持したる貴人が洞の中に隱ひぬ」と述べた處であるが更に抒情詩以外では「人間の運命に就きて」(*Be Monna Wyrdum*; Exeter Book, fol. 87ᵃ—88ᵇ) といふ詩がある。この中には火で燒け死ぬのや絞首臺に吊下つた男の眼を鴉が啄むのや、醉漢が爭つて刺殺されるのや樣々の死にざまの描寫が長々と續いてゐる (ll. 10—57)。又それらの死を嘆く者のことが出てゐる (l. 14, l. 46, l. 57) のである。

戀愛を扱つた場合にも鬪爭が織込まれてゐることは既に *The Wife's Complaint* に於て見た處であるが、*Wulf and Eadwacer* も矢張り鬪爭によつて愛する男から引離された女の獨白になつてゐる。この詩は Exeter Book に於て第一の「謎詩集」(*The Riddles*) の前に置かれてあり (fol 100ᵇ—101ᵃ)、Wulf について述べてゐるので、Heinrich Leo (1857)[註四] 以後多數の學者は、これを詩人 Cynewulf の名を表はす謎詩であると考へてゐた。然し H. Bradley (1888) が、「所謂 (第一の) 謎詩なるものは全然謎詩に非ずして、*Deor* や *The Banished Wife's Complaint* と同樣な劇的獨白の斷片であり、此等の中の後者

に對しては主題及び扱ひ方の孰れに於ても著しい類似を示してゐる」[註五]といふ見解を發表して以來、Herzfeld (1890), Holthausen (1891), Gollancz (1896) らがこれを支持し[註六]、今日では殆ど此詩を抒情詩なりとするのが定說になつてゐる。然し此詩に描かれた事件が斷片的であつて其全貌が明かでなく、又 'aþecgan' (ll. 2, 7) や 'dogode' (l. 9) や 'earme' (l. 16) の如き意味の明かでない語を含んでゐて、今日なほこの詩のテクスト及びその解釋には異說が多い。筆者は 'aþecgan' を 'þicgan' (「食ふ」) の causative と考へて「食を與ふ」の意味に解し、寫本の綴 'dogode' を 'hogode' に改めて 'hogian' (「想ふ」) の過去形と見、'earme' を 'earh' (「意氣地なき」) の對格形と取る。——女は Eadwacer と一つの島に暮し、その間に一人の子まで儲けてゐるが、彼女はこの男を憎んでゐる。彼女の慕ふ Wulf は離れた別の島に殘忍な男らに監視され死を以て脅されてゐる。女は今 Wulf の如く食物に事缺くことはなしといへ、昔 Wulf と共に在りし時の方が幸福であつた。「雨ふる日、われ涙にくれて坐したる時、かの猛き人双腕(もろうで)もて我を抱きゝ。そは我には歡びなりき、しかも亦悲しみなりき。」('þonne hit wæs rénig weder ond iċ réotigu sæt, / þonne mec se beaducáfa bógum bilegde : / wæs mé wyn tó þon, wæs mé hwæþre éac láðȝ'; ll 10—12)。これは Wulf が女の許から引離されて行く時の別れを言つたのであらう。かくて女は Wulf を慕ひ、聽ては彼が、彼女と Eadwacer との間に生れた意氣地なき兒を森へ連れ去り、彼女をも解放するであらうと言ふ。

（註四）Leo の說は A. S. Cook, 'The Riddles of Cynewulf,' *The Christ of Cynewulf*, Boston, 1900, pp. liii—lvi に詳しく紹介されてゐる。筆者はこれ及び K. Jansen, *Die Cynewulf-Forschung* (Bonner Beiträge zur Anglistik, Heft xxiv), Bonn, 1908, S. 93—98 に據つた。

（註五）'the so-called riddle is not a riddle at all, but a fragment of a dramatic soliloquy, like *Deor* and *The Banished Wife's Complaint*, to the latter of which it bears, both in motive and in treatment, a strong resemblance.' (*Academy*, xxxiii, 1888, pp. 197 f.; F. Tupper, *The Riddles of the Exeter Book*, Boston, 1910, p. liv に引用されたものに據る。)

（註六）K. Jansen, *Die Cynewulf Forschung*, S. 97; E. E. Wardale, *Chapters on Old English Literature*, London, 1935, p. 34. 又 *The Husband's Message* には宿怨の鬪爭（'fæhþo'; l. 18）のために故國を逐はれ、妻（又は單に愛する女）を殘して異鄕へ去つた男が現はれる。尤もこの男は遂に他鄕で苦難にうち克ち、安樂な地位を獲得して、其處へこの女を招いてゐるのであるが、矢張り戀愛に鬪爭を織込んだ主題である。主君や血族や家を失つて異鄕に獨り彷徨する者の苦痛と嘆きとは *The Wanderer* にも現はれて居り、*The Seafarer* にもある（ll. 15 ff.）。*Deor* にも主君と地位とを失つた者の悲しみがあり（ll. 35—41）、又 Þéodríc が他國に亡命した苦しみのことが語られてゐる。いづれにも榮華の沒落や幸福の喪失といふ motif は見られるのである。

*Beowulf* の詩の中に、自分の子が絞首臺上に搖れるのを見た年老いた父親の嘆きを描いた部分がある（ll. 2446—2462）。「こゝに於て彼は歌語り、悲しき歌を口誦まむ」（'þonne hé gyd wrece(ð), / sárig-

ne sang'; ll. 2446ᵇ—2447ᵃ) といふ一句がある。その後に現はれる描寫は *The Wanderer*, *The Seafarer* の後半や *The Ruin* の詩と同樣の motif である。彼がわが子の部屋を見ると、これが荒れ果てゝ風の吹き曝す酒宴の館の樣に見える。武士らは墓穴の中に眠つてゐる。昔あつた竪琴の響も、住居の中の歡樂もない。かくて彼は己が部屋へ行き、「一つ又一つ悲しみの歌を唱ふ」(ll. 'sorhleoð gæleð / án æfter ánum'; ll. 2460ᵇ—2461ᵃ)。この「一つ又一つ悲しみの歌を唱ふ」といふ表現は J. Hoops の說(註七)の如く、勿論實際に嘆きの歌を吟じた意味ではないであらう。然し又これを單に無言で涙を流して悲しんだといふ意味に取ることも誤であると思ふ。筆者はこれを嘆きの言葉を獨白するといふ意味に解する。「歌語り、悲しき歌を口誦まむ」(ll. 2446ᵇ—2447ᵃ) といふのも同樣である。此等の間に見られる描寫 (ll. 2455—2459) が、*The Wanderer* 等の矢張り獨白の形式になつた抒情詩に現はれるものと殆ど同じである點は注目を要する (例へば *The Wanderer*, ll. 75—84; その部分に就いて既に述べた處を參照)。「悲しみの歌」(嘆き) といふことがアングロ・サクスン人にとつては常に「榮華の沒落」や「幸福の喪失」を扱つた詩の或一つのタイプを聯想せしめたと考へられるからである。換言すれば、現存する抒情詩と同樣な劇的獨白 ('dramatic monologue') として同樣な motif を扱ひ、同じ樣な描寫を用ひて嘆きの感情を表はした詩が非常に流行したものと推測されるのである。アングロ・サクスン時代に作られたラテン語の或る Glossary には 'cantilena' (「歌」) を 'sárlic blis' (「悲痛を催さしむる慰み」) と譯(註八)してゐる。

この解釋を施したアングロ・サクソン人は抒情詩といへば悲痛なものと思つてゐたのであらう。

（註七）J. Hoops (*Kommentar zum Beowulf*, Heidelberg, 1932, S. 263) は 'sorhléoþ gæleþ' を比喩的に解すべしとして 'er bricht in Klagen aus' と譯してゐる。しかし彼は 'án æfter ánum' の解釋に F. Klaeber (*Englische Studien*, lxvii, S. 402) の說を採つて「一人が（他の）一人の者に就いて」('der eine um den einen') とし前に *Beowulfstudien*, S. 126 に示した解釋を棄てゝゐるのである。それはよしとしても l. 2446 の 'gyd wrece' を文字通り '(mag er) ein Lied singen' と譯してゐるのは不可解である。これも矢張り「比喩的」に解すべきであらう。

（註八）T. Wright, *Anglo-Saxon and Old English Vocabularies*, 2nd ed. by R. P. Wülker, London, 1884, I, p. 198, No. 21.

（一九三九・一・三一）